

JapaNewsletter (毎月 1 日発行)



INDEX

1. コラム：求められるシンクタンクの新しいかたち
2. 寄稿：ゴリラからのメッセージ、再び
(郵政建築研究所／アトリエ・アーキポスト 観音克平)
3. 解説：「社会実装」とは
4. 関連情報：「旬報 時代のシグナル！」として切り出し
5. 連携団体及び Japa からのご案内
6. 読者の声：
 - ・ 俳句随想五七調の起源～リズム論事始～ その 5
(内閣府地域活性化伝道師・(俳句)ARCセッション主宰 藤村望洋)
 - ・ 第二の人生生涯現役で行く その 15
(作詞・作曲家 高橋育郎)
7. つばやき (編集後記に代えて)

注：担当執筆者名の記載のない項目は、編集発行人(芝原靖典)による。

※ 本 Newsletter は Japa 日本専門家活動協会が毎月 1 日発行の会員及び関係者向けの Newsletter です。
1 ヶ月後に当協会の HP <https://japa-fellowlink.wixsite.com/japa/newsletter> に公開しています。

◆◆ 「旬報 時代のシグナル！」ご購入の案内 ◆◆

時代構造が大きく揺らぐ今、何が時代の本質的な変化なのか。表層事象ではなく構造的なシグナル情報を厳選し、社会システムデザイナーによるキュレーション旬報 [毎月 3 回 Japa 会員向け] を発行・配信中。入会をお待ちしています。

1. コラム：求められるシンクタンクの新しいかたち

(Japa 日本専門家活動協会代表理事 芝原靖典)

人口の減少、進む高齢化、AI がもたらす変革、そして相次ぐ大災害。これらは互いに連鎖し、複合的な構造問題として日本社会全体を覆いつつある。世界に先駆けて複合課題に直面する「課題先進国」でありながら、深刻さに見合う「知と実践をつなぐ回路」は整っていない。研究者は論文を書き、行政は計画を立てるが、現場の実践知と政策づくりの間には、断絶がある。

日本のシンクタンクは 1970 年前後に生まれ、六度のブームを経てきた。しかし、政策づくりを行政が独占する構造は根強く、外部の知恵が政策形成に加わる余地は広がらなかった。シンクタンクは「組織」として成立したが、「民主主義の道具」として社会に根づかなかった。固定組織の維持費が独立した政策提言力を弱め、独立系シンクタンクの多くは資金不足で姿を消した。「政策研究は採算が合いにくい」という日本特有の構造がこの状況を今も温存している。

縦割り行政は、輻輳化（複数の課題が絡み合い連鎖する状態）する社会課題に対応しきれない。地域の現場には多様で確かな実践知が積み重ねられているが、専門分野・組織・法制度・地域の境界で分断され、「集合知」としてまとまらない。「社会実証」（政策や技術の効果を確かめる実験的な取り組み）に多くの予算が投じられても、実証期間が終われば打ち切れ、「社会実装」（成果を恒久的な仕組みとして根づかせること）に至らない例が繰り返されている。

閉塞を破る鍵は三つある。第一に、政策の「中心」ではなく「周縁の現場」を出発点とすること。第二に、組織ではなく「個人」を基点とすること。副業の広がりやプロボノの浸透で、その条件は整いつつある。第三に、「社会実証」から「社会実装」へつなぐ機能体を育てること。この三つから導かれるのが地域発の「個人ベースのネットワーク型 Think & Do Tank」である。

「Think & Do Tank」とは、研究（Think）と実践（Do）を行き来しながら社会課題の解決に取り組む「知の共同体」である。固定組織ではなく、一人ひとりの志と専門性を起点に、テーマごとに最適な専門家がそのつど集まる。課題に合わせて専門家を編成（プロジェクトチーム）する柔軟さにより、「固定組織が抱える弱点」を避け、個人の自律的な判断で独立性を保つ。

活動を続けるための財源は、レベニューシェア（収益分配）や寄附などの組み合わせを基本とする。寄附の形としては「クラウドファンディング+ふるさと納税」の仕組みを活かした方法が有効である。自治体が特定目的基金として寄附を受け取り、Think & Do Tank へ交付する仕組みにより、他地域の市民は単なる納税者から「地域の未来を共につくる参加者」へと変わる。

各地域の自律的な実践が積み重なることで、日本全体の社会課題の解決が実現していく。中央から統一のモデルを押しつけるのではなく、周縁から生まれた自律的な創生が重なり、やがて日本社会全体のレジリエンス（適応する力）と活力を取り戻す。知と実践を往復するプロフェッショナルのネットワークこそが、地方創生から日本創生へとつなぐ新しい「仕組みの土台」である。各地で、地場に根付いた「個人ベースのネットワーク型 Think & Do Tank」（〇〇地域・Think & Do ネットワーク）が生まれ、そして全国でつながっていくことを夢見ている。

補：本コラムのバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column/>、詳細は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>に掲載

2. 寄稿：ゴリラからのメッセージ、再び

(郵政建築研究所／アトリエ・アーキポスト^{かんのんかつひら} 観音克平)

自然を探究することから科学が生まれ、その中から、数多くの学問分野が派生した。芸術（美術、音楽）や文学も、自然の中での人間の営みや願望を追求し表現するという意味ではこれに含めてよい。人間の叡智には限りがある。そのちっぽけな頭で、宇宙、あるいは大自然の現象のごく一部を解明した（と思っている）にすぎない。したがって、時代とともに、自然の捉え方が変われば、その認識あるいは、対応の仕方も当然変わってくる。われわれに身近な経済学、工学あるいは建築とても同様である。異なるのは、それらが、ほとんどすべて実用を目的として成り立っているということである。

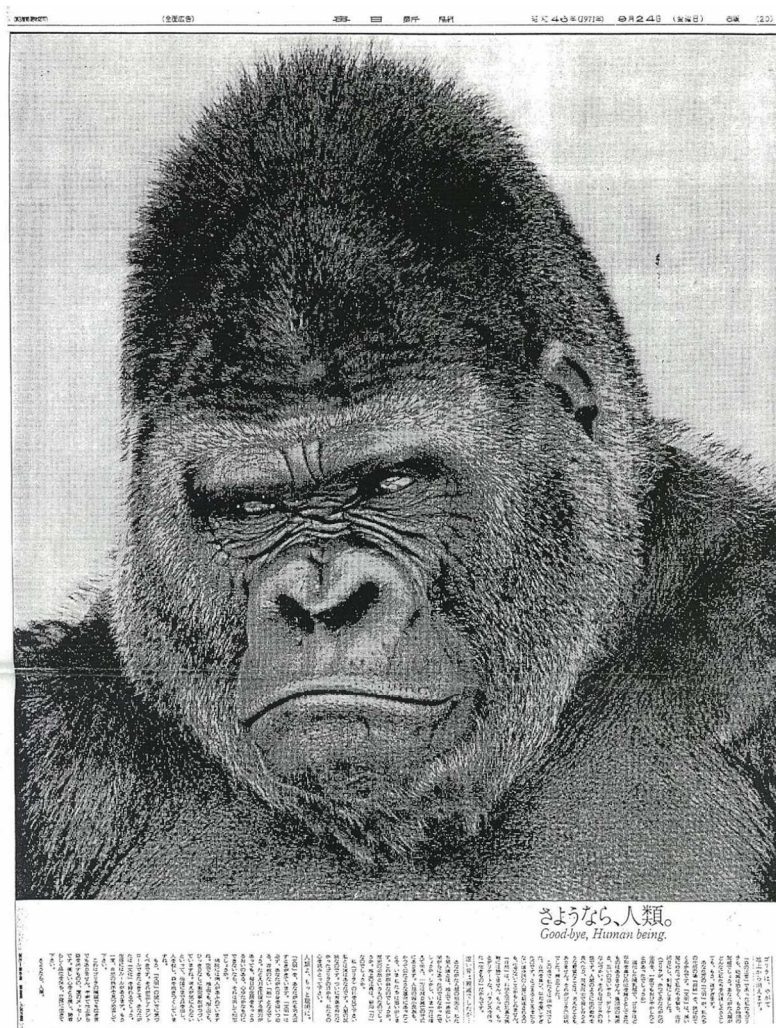
元来（とくに西洋においては）、パスカルに見られるように自然科学全般が、「神の摂理」に近づきたいという人間の敬虔な欲求に根ざしていた。しかし、「神が死んでしまった」（？）今日では、その謙虚さが失われ、派生した各分野の研究だけが、全体像とは別に、どんどん細分化し、深化している。バイオ・テクノロジーや遺伝子工学に見るように、人間は大胆にも自然の仕組みを操作することに挑戦しているが、恐ろしいことに、自然の設計図に手を加えることの危険性を顧みていない。急速な勢いで進んでいる AI の濫用、然りである。

「地球にやさしい」という言葉が使われはじめて久しい。ところが、現実はその反対で、人間は、ますます地球を傷めつけ、自滅の道を突き進んでいる。地球を一つの有機体と考えれば、これらの人間の行為に対して、何らかの拒絶反応があるはずである。「地球からのしっぺ返し」である。事実、ここ数十年に限ってみても、地震、噴火、洪水、高潮、冷害、旱魃（かんばつ）そして昨今の猛暑（いや酷暑とか）など、地球の異常現象は枚挙にいとまがない。これに、人間由来の酸性雨をはじめとする大気汚染、温暖化、砂漠化、オゾン層破壊、森林破壊、生態系破壊などの環境破壊、さらに各地で問題となっている建築・街並み破壊とが加わり、まさに事態は切迫している。

これにつけて、鮮明に思い起こされるのが、今から半世紀以上も前の新聞（『毎日』1971年9月24日付）に載った有識者による一面広告である。口をへ字に結んだゴリラの悲しそうな顔の大字しの下に、「さようなら、人類。」というタイトルで始まるメッセージが添えられていた。先の万博（1970）が終わり、高度成長にもかげりが見えはじめ、多発する公害が紙上をにぎわせていたころである。環境庁が発足したのもこの年である。

この広告は、次々と環境を破壊してはばからない人間の横暴に警鐘を鳴らした。しかしそれから半世紀、残念ながら、ゴリラの訴えに耳を貸さないまま今日に至ってしまった。喫緊の問題は、先に述べた異常現象に加えて、震災、津波、豪雨、台風、竜巻、また、人為的な環境破壊からくる温暖化、それに伴う海面上昇・赤潮、山火事、原発事故（放射性物質による汚染）、昨今のパンデミック（各種ウィルス感染の世界的蔓延）である。そして今、日本はもとより、世界各地で報じられている異常な酷暑も然り。地球の怒りと「しっぺ返し」はますます激化している。

《人類よ、もっと聡明に》ゴリラは叫んでいる。《「文明」を、あなたがたも考え直すときがきています。「文明」は必ず、あなたがた自身を追いつめる容赦のない「敵」となるでしょう。》と。



ゴリラは、文明過信の人間の驕りを戒めている。現代文明が人間の欲望を何でも可能にすると思うのは大きな過ちと指摘している。滅びゆく種の代表としての悲痛な叫びである。

同じことが、我々のかかわる建築についても言える。現代文明（人間不在の合理主義）とバブル経済の後遺症（恣意と放縦）が、あちこちにその醜い姿をさらしている。日本各地で進行する、再開発という名の環境破壊である。一例を挙げれば、今物議をかもしている中野サンプラザの放置、さらに身近には、前田旧侯爵邸取り壊しに代表される鎌倉の別荘文化破壊である。ゴリラならずとも「建築文明」の末路を見る思いがする。今からでも遅くない！襟を正して「建築文化」の原点に立ち戻って考えるべき時が来ている。

ゴリラはこう結んでいる。《もう一度、自然の秩序を見つめ直して下さい。これは、ゴリラの嘆願でも泣き言でもありません。やがて地上から姿を消すものの、愛のメッセージです。さようなら、人類。》

補：本寄稿のバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/professional> に掲載

3. 解説：「社会実装」とは何か

(日本専門家活動協会 芝原靖典)

(1)実証と実装はどう違うか

日本では毎年、数百件を超える実証実験が各省庁の呼びかけで行われている。自動運転、ドローン配送、スマートシティ、遠隔医療など、どれも技術的には成功したと報告されるが、その後社会が変わったと実感する人は少ない。

実証実験は、技術がうまく動くかどうかを確かめる段階にすぎない。これに対して社会実装は、その技術を制度や暮らしの仕組みに組み込み、支援が終わったあとも自分の力で続いていく状態をつくる営みである。実証が問うのは「できるか」であり、実装が問うのは「続くか」「広がるか」である。この二つを区別せずに使う例が多いことが、政策評価をゆがめている一因である。実証がうまくいっても、現場の手順や担い手の育成、既存の制度との接続が整っていなければ、技術はやがて使われなくなる。

比較軸	概念実証 (PoC)	社会実証	社会実装
問い	原理的に機能するか	有効か・受容されるか	続くか・広がるか・信頼されるか
対象・期間	限定的・制御下	実際の社会環境（有期）	社会システム全体（無期）
成功の基準	動作確認	仮説の検証	支援終了後の自走・定着
主な関与者	研究者	研究者・行政	研究者・行政・企業・住民
位置づけ	入口	実装への橋渡し	イノベーションの完成

(2)社会実装という考え方の起源

「社会実装」という言葉が政策文書に登場し始めたのは 2000 年代以降であるが、その考え方の源はもっと古い。20 世紀後半の欧米では、大学で生まれた技術を産業界へ橋渡しする「技術移転」が政策の中心であった。米国の 1980 年バイ・ドール法（大学や研究機関が、公的資金による研究成果を自ら特許化できるようにした法律）はその代表例であり、日本を含む各国の政策に影響を与えた。

しかし技術移転だけでは、特許が実際の製品や社会サービスに結びつくとは限らない。制度の壁、市場がまだできていないという壁、社会に受け入れられるかという壁、この三つが立ちばだかつていたためである。技術を移すことから、価値を社会に根づかせることへと関心が移るなかで、「社会実装」という考え方が育っていった。日本では 1995 年の科学技術基本法の制定をきっかけに、研究成果を社会に還元することが政策的に重視されるようになり、定着・普及・制度化までを一体で支援する方向へと軸足が移っていった。

(3)日本はなぜ実証で止まるのか

実証実験が終わったあとの典型的な流れは、事業の終了とともに報告書だけが残し、また次の実証が始まるというものである。背景には、単年度予算のために継続する財源が用意されないこと、評価の指標が「実証を完了したかどうか」にとどまり「定着したかどうか」を問わないこと、省庁ごとの縦割りで進められ実証どうしの連携が乏しいことがある。

この課題は日本だけのものではない。国際的にも「死の谷」や「パイロット・トラップ」（試験的な取り組みが成功しても、そこから本格運用へ広がらずに終わってしまう状態を指す言葉）など、実証から実装へ移る段階で支援が途切れる現象を指す言葉が数多く存在する。日本に特徴的なのは、こうした海外の知見が政策の設計に十分取り入れられていない点である。

(4)制度は実装を後押ししているか

日本は「構造改革特区」「国家戦略特区」「規制サンドボックス」（新しい技術や事業を、一定の条件のもとで規制を緩めて試せる制度）など、社会実装を後押しする制度をくり返してきた。これらは規制の壁を一時的に取り払い、新しい技術を試す場を用意する点では有効であったが、試す場をつくることと、その成果を制度として定着させることは別の課題である。

特区制度に共通する弱点は、試すことはできても、そこで得た学びを全国に広げる回路が弱いことにある。成功した事例が全国展開に至るには、省庁間の調整や財源の手当て、担い手の確保など、いくつかの関門を同時に越えなければならない。

(5)歴史が示す摩擦の構造

経済学者シュンペーターが「創造的破壊」と呼んだ現象、つまり新しい技術や制度が古いものを駆逐しながら社会を変えていく過程は、産業革命以来くり返し起きてきた。そしてその変化は、いつも摩擦と抵抗をともなってきた。

各国のライドシェアサービスをみても、いまなおタクシー業界や規制当局との対立を繰り返している。こうした摩擦は、誰か特定の人の悪意によって起きるのではない。制度や市場がもとも持っている変わりにくさと、変化によって利益を得る人と損失を被る人との間にある不公平さが生み出す、構造的な現象である。

(6)実装を支える理論と条件

社会学者ロジャーズの普及理論は、すぐれた技術であっても試すことができ、目で見て確かめられ、これまでの習慣になじむものでなければ広がらないと示した。経済学者ノースは、制度には過去の選択が現在を縛る経路依存性（いったん決まった仕組みからは抜け出しにくいという性質）があり、新しい仕組みを定着させるには長い時間をかけた働きかけが必要だと論じた。

国内外の研究からは、社会実装を進めるために必要な五つの条件が指摘されている。第一に、実証の段階から実装後の財源や担い手を設計に組み込んでおくこと。第二に、評価の軸を実証の件数から定着した割合へと移すこと。第三に、実装を専門に担う人材を育てること。第四に、政府や企業、地域住民が対等な立場で関わる協働の体制をつくること。そして第五に、数年から十数年という単位で腰を据えた支援を続けることである。

問うべきは「実証は成功したか」ではなく「社会は変わったか」である。この問いを転換することこそが、実証を重ねるだけの政策から抜け出す第一歩となる。

補：本解説のバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column/>、詳細は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>

4. 関連情報

本年度より、世の中の動きが激しく、月刊で紹介するには時機を逸する状況となってきたことを受け、従来の「関連情報」を Newsletter から分離させ、「旬報 時代のシグナル!」として、よりタイムリーに「直近 10 日間の時代のシグナル」としてキュレーションし、配信（毎月 1 日、11 日、21 日発行：発行日が土日の場合は週明け・祝祭日の場合は翌日）するように変更しています。

本旬報は、既往の分野・組織・枠組み・年齢・地域・概念を越えて、社会課題・地域課題に対して、個人として社会に何かを起こしたいと考えている人に、時代の構造的な変化を読み解き、自らが動き出すための手がかりになればとの思いでキュレーション編集しています。

文献情報は対象期間（直近 10 日間）内に公表・更新されたなかから編集発行人が厳選し、かつ、発行主体・日付・URL が確認できるものに限定しています。

■「旬報時代のシグナル」の構成 ※直近号（2026 年 7 月中旬号）のタイトル

【今旬の問い】 制度は整い、現場はきしむ。あなたはどこで設計に加わるか

【時代環境】 地政学という与件、備えという個人の選択

[関係文献情報 5 件](#)

【時代構造】 骨格の軋み、委ねられる個人の判断

[関係文献情報 5 件](#)

【日本創生・地方創生】 都市と農村のあいだ、個人が担う設計余地

[関係文献情報 5 件](#)

【社会的孤立・孤独・Well-being】 統計に映らない一人ひとりの現実

[関係文献情報 4 件](#)

【思惟・社会システム論】 測れないものの居場所という設計思想

[関係文献情報 2 件](#)

この「旬報 時代のシグナル!」は Japa 会員（会費納入者）のみに限定配信しています。購読をご希望の方は、Japa の会員（一般会員、会費 3,000 円/年）としての入会が必要です。

購読（Japa 入会）に関するお問合せは、本 mail にその旨記載して返信ください。

5. 連携団体及び Japa からのご案内

▼JCAABE 一般社団法人日本建築まちづくり適正支援機構「コンクール」の案内

- ・ テーマ：JCAABE 建築まちづくりコンクール 2026
／日常（いま）と非常時（もしも）をつなぐデザイン
- ・ 一般部門：現存する建築やまちづくり活動、学生部門：アイデアコンペ
- ・ 応募締切：9月15日
- ・ 公開審査：10月25日
- ・ 審査員：市古太郎、岩淵諒子、田中元子、三井所清典、泉山壘威、田島則行、津川恵理、
栃澤麻利、山本想太郎、連健夫
- ・ 主催：JCAABE 日本建築まちづくり適正支援機構
- ・ 協力：キャリア・ナビゲーション、HEAD 研究会
- ・ 詳細：JCAABE ホームページ <https://jcaabe.org/contest/contest2026/>

▼Japa&青山 Hicon 共同「研究会」の参加者募集の案内

- ・ テーマ/名称：ひきこもり等支援システム開発普及研究会
- ・ 共同主宰：Japa、青山 Hicon（青山ヒューマン・イノベーション・コンサルティング(株)）
- ・ 設立・活動：2022年4月設立。5月より Zoom 会議にて毎月1回開催中
- ・ 参加者：行政、支援機関、有識者、IT 実務者、その他 現時点の参加者数 21 名
※ 参加者歓迎：プロボノ、レベニューシェアで共創いただける当該分野の専
門家・実務家、IT/AI エンジニア、社会課題解決関心者
- ・ 参加申込：Japa 事務局

▼JapaNewsletter 掲載写真の募集

JapaNewsletter の冒頭に掲載する写真を読者の皆さまから募集しています。

掲載を希望する写真（著作権所有／フリー）がありましたら、画像 file をキャプション付きで事務局までお送りください。JapaNewsletter 編集仕様に則り掲載いたします。

ただし、掲載希望多数等、事務局の判断で掲載できない場合がございます。

▼Japa Newsletter の「読者の声」の募集

Japa Newsletter に関する感想・ご意見、その他投稿を、随時、お待ちしております。

▼Japa 日本専門家活動協会の会員募集

Japa は、会員（個人）と連携団体の方々の参加と協働により活動しています。

Japa は、随時、会員〔正会員（年会費 1 万円）、一般会員（年会費 3 千円）〕を随時募集しています。

会員になると、「旬報時代のシグナル」（月 3 回発行）が講読できます。

▶入会案内の詳細 <https://www.japa.fellowlink.jp/admission>

6. 読者の声

■俳句随想五七調の起源～リズム論事始～その5

(内閣府地域活性化伝道師・(俳句)ARCセッション主宰藤村望洋)

(10) 「海のリズム」

「唄」(リズム)は、伝達・伝承のために必要であった。では、そのリズムは、どこからやってきたのか？海からきたのか？

人間は動物である。服を着て、車に乗り、コンクリートの中で生活や仕事をしていても動物であることに変わりはない。動物の生存に欠かせない重要な要素の一つは、「巣」である。安全を確保して眠ることができ、子供を産むことができる巣(家)である。次に動物として重要な生存条件は、巣の周りのテリトリー(縄張り)の確保である。テリトリーは2つの意味で重要である。一つは餌場として。もう一つは、子育てを安全に行うことができる場として。自分と家族の生存条件としての空間(テリトリー)には、道や隠れた場所や自分のサイン(しるし)や臭いがあり、テリトリーという意識は、域内のあらゆる動物や植物をはじめとする環境との関係を認識しているということでも。この動物としてのテリトリーが、自分たちの「まち」であり、まちづくりの原点であると言える。

動物としての人間にとって、巣とテリトリーが生存にとっての必要条件であるのと同じく、生物としての人間は60兆個の細胞で成り立っている生命体であるから、「リズム」は、生存にとっての必要条件であると断言する。

海岸に立ち、寄せては返す波の動きを感じるとき、その単調さにもかかわらず、いつまで見ても飽きないものがある。海を見ていて、体全体が優しく包まれ、心の中から安らいでいくような気持ちになったことが誰にでもあるのではなからうか？

46億年の地球の歴史で、38億年前ごろに海が姿を現し、やがて、生命の最初の一つの細胞が、波の振動の中で生まれ、浅瀬の光合成と波動の中で細胞分裂を繰り返し、60兆個の細胞を持つ「ヒト」に進化した。その「ヒト」は、母の羊水の揺れの中で進化の数十億年を追体験しながら生まれる。

私達の60兆個の細胞は、一つ一つがその波動(揺れ)のリズムを根源的に持っている。海は私達の遠い生命の起源のリズムである。海に抱かれるとき、ひとは母の胎内に帰り、命の起源へと回帰するのではなからうか。

赤ちゃんは、根源的な遠い海のリズムと母の羊水の揺れを「ゆりかご」で感じ安心する。この揺れを体内に持っているので、赤ちゃんは船酔いしない。しばらくすると赤ちゃんも揺れのリズムを失う。人類は陸に上がって海のリズムを失った。60兆個の細胞は、そのエネルギーの源としてのリズムを、生存の必要条件として求めている。「海のリズムの欠如」を補完するために、人類は文化を創造してきたと想像することができる。音楽やダンスはもとより、あらゆる文化の基盤に「海のリズムの欠如」を補完しようとする機能があると考えられる。海のリズムは、文化としての俳句によって立つ基盤であり、動物としての人間の存在基盤で

もあるのではなかろうか。

最新のアインシュタインを超える物理学は、宇宙と原子の存在原理を、振動（リズム）と共振（共鳴）作用としてとらえている（超弦理論）。小さな細胞を構成する小さな原子もまた、リズム論の内にある。幾十億年もの間、海の千変万化するリズム（ $1/f$ ）によって生まれ鍛えられた細胞は、リズムの持つ特性、つまり共鳴という作用を学んだ。この共鳴作用による連鎖反応こそ進化の原動力となったのである。たとえば連鎖反応のリズムの乱れが癌細胞発生につながると言われている。継続的な海のリズムの必要性がここにある。

細胞レベルの世界は、人にとっては無意識の世界である。無意識の世界は、細胞レベルでの混とんとした原始のリズムの塊であり、その動きの中から共鳴作用によって進化したリズムの連鎖反応が生まれ、やがて秩序だった大きなリズムの世界、つまり意識の世界を創造する。無意識の世界に直接働きかけて、リズムを秩序化する力が、海の無限のリズムにはある。

海のリズムに全身をゆだねるヨットの島めぐりの航海は、大海の中で、この無意識の世界（60兆個の細胞の一つ一つ）に対する海の波動によるアプローチを特色としている。例えば、学校へ行けなくなってしまった不登校の生徒や、あるいはうつ病で落ち込んでしまった人は、なかなか自分で頑張ろうとしても立ち上がることが困難である。自動車のバッテリーが上がってしまった状況と同じだと思われる。バッテリーは、通常の使用状態であればボルテージが下がっても、走っている間に自動的に充電する。しかし、ボルテージがあるパーセンテージ以下に下がってしまうと自家発電では充電することが出来ず、取り外して急速充電して、あるボルテージ以上にする必要がある。

人間のエネルギーもバッテリーと同じで、ストレス等で急に細胞レベルのエネルギーのボルテージが一定パーセント以下に下がってしまうと自分では充電できない。細胞レベルでの充電が必要となる。細胞一つ一つへのエネルギー補充は、細胞が持つ根源的な共鳴作用を活用して、海の波動に身を任せること、できれば3か月程度海に身を任せること、で充電できる。3か月というのは、60兆個の細胞は毎日再生しており、3か月くらいで海のリズムで元気になった細胞が体に増えてくるからと言われている。漢方薬なども3か月は最低飲み続けるということと同じである。

これを、筆者は「海のリズムと細胞バッテリー理論」と呼んで、この理論に基づき、不登校児のヨットの学校を開校した。戸塚ヨットスクールはスパルタ方式によって海で鍛えるシステムだが、筆者のは、ただのんびりと海に身を浸すという方法論である。ただし、バッテリーは取り外して別の環境で急速充電する方がいいので、ヨットで南太平洋のサンゴ礁へ行って、のんびり海に浸かる学校である。海のリズムに浸りながら、学校へ行く必要もなく、おおよそ3か月でバッテリーは充電できる。

この無意識の世界での、細胞レベルでの「海のリズム」が、文字を持たない大和言葉の「唄」のリズムの起源である。DNA化された五七のリズムは、起源である海のリズムへとつながり、俳人たちを細胞レベルで活性化させる。多くの俳人たちの長生きの秘訣は、この「海のリズム」であるに違いない。

（さて、ここからは、二拍+二拍とか休止符とかの本格的な「リズム論」に進まねばならないが、とりあえず、「大和言葉と万葉集（漢字=文字）との出会い」については、ここで一段落としたい）。（完）

■第二の人生生涯現役で行く その15

（作詞・作曲家高橋育郎）

平成29年に新たなご縁が二つ

LVC では、春と秋にサミットを行っていた。会場は飯田橋の東京しごとセンター。先ずは、春のこと。セミナーが終わると夕食ときで、近くのレストランで二次会を催した。

9時近くなったので、そろそろお暇しようと靴脱ぎ場に行くと、6人ほどの卓を囲むグループの誰かが私を呼び止めた。何かと思い近づくと「この方は、国連平和の鐘を守る会の方ですよ」と紹介してくれた。その方は「高瀬聖子です」と自己紹介し、「これをご縁に今後ともよろしく願いいたします」と挨拶した。私が音楽関係のことをやっているのを聞いたようだ。

そして後日「コインでつなぐ平和の鐘」=ニューヨーク国連本部に鐘を贈った日本人の物語=という絵本と会報を頂いた。

世界平和を願って、こうした行動を行った日本人のことを初めて知った。

もっと言えば、こうした信念を持った方は、国を挙げてもっとPRすべきと思った。国の名誉だと思った。高瀬さんは、私と話がしたいと誘った。家が多摩なので新宿駅が真ん中ということで、当駅でお会いした。マネージャーと一緒にみえた。

私は「国連平和の鐘の歌」を作って贈った。しかし、内容が固すぎて、今どきの若い人には通じ難いものだった。そして「長崎の鐘が鳴る」「ああ浦頭」「ひめゆりの塔」のCDを贈った。

そして2019年（令和元年）11月16日。日本橋社会教育にて「国連平和の鐘コンサート」を開催した。たいらいさお、大西ようこ、星野真弓ほかが賛助出演した。

司会は佐々木博子。ここで私の「桜を讀める歌」が朗読された。

高瀬さんは不定期ではあるが、会報をおくってきた。また、勉強会を行った。私はその都度出かけた。新宿で行われたときだった。靴脱ぎ場で靴を履こうとしたら、まだ挨拶をしていない方と一緒にいたので、ご挨拶をして「どちらまでお帰りですか」と尋ねたところ新検見川のこと。「私は幕張ですよ。それでしたら一緒にしましょう」ということで一緒に帰った。石塚と名乗った。車内では、いろいろお話をした。

彼は最近までニューヨークの日本人学校校長だったそうで、高瀬さんとニューヨークで知り合ったとのこと。出身は大多喜だった。ここでもご縁があった。私の詩「輝春大多喜城」が大多喜でよく歌われたからだ。

そこで、彼とは時々お会いすることにした。私の誕生日には自宅に招いてくれて、ご馳走で祝ってくれた。私は自分のCDを送り、また月刊「三河アララギ」と隔月発行の「たのし」を送

った。「三河アララギ」には、28 年 4 月号から毎月詩を載せている。「光るお蚕さん」が最初だった。

彼は稲毛に塾を開いていて、国際的に活躍されている尊敬すべき人格者だ。

次に秋のサミットだ。ここでも二次会のとき紹介された。

40 人ほどが広いお座敷に集まってのことだ。会の後半に、誰かが女性を連れてきて私に紹介した。佐々木博子と名乗り「ROCO と世界の留学生」のイベントをやっているとの事。それだけ言うと席に戻った。二次会が終わり靴脱ぎ場に行くと、佐々木さんと一緒になった。私が先に出ると、後から男性と一緒に私の後を付いてきた。もの言いたげなので、目前にあった喫茶店に立ち寄った。一緒に男は、私がかつて縁のあった会社の方だった。

佐々木さんは、近タイイベントを行うから来てほしいと誘った。案内チラシをもらった。それから自分の語りが入った CD を頂いた。

2018 年 10 月 20 日、国際文化会館にて開催の「行ってみたいなよその国」のタイトルだ。

国際文化会館は、新渡戸稲造が国際連盟に行く前に事務所を持っていた。それから高松さんが会員になっている。当日、私は出かけた。12・3 人ほどの留学生が、それぞれ民族楽器のソロ演奏をした。踊もあった。主賓席にサンマリオの全権大使とグループの理事の方がいた。佐々木さんは、司会とナレーションをやった。京都同志社大学の卒業で、国際的に幅広い活躍をされている。コロナ禍が何故起きたのか。そのあたりメディアで報じていない、裏事情にも詳しくかった。Web ラジオを運営している。

そして、令和元年 11 月に「国連平和の鐘コンサート」を、高瀬さんと共催して、日本橋社会教育会館で開催したが、先にも述べたとおり、佐々木さんが司会を担当したのだった。

平成 27 年 8 月「健康長寿協会」のホームページでインタビューを受けて協会誌に載った。

28 年に、「77 歳 77 人の波平さん」の 77 人文集に載り出版され、77 人の集まりに参加した。そして五反田のスタジオに呼ばれ対談、動画になってパソコン配信された。

29 年に「生涯現役サミット」が 6 回をもって打ち上げ。高瀬聖子さんが会場で紹介された。

同年 11 月「生涯青春の会」のセミナーで「里見八犬伝に見る武士道」を語った。

30 年の LVC サミットで、私はステージに立って体操の指導をした。このとき、たまたま日刊スポーツの記者がみえていて、司会者が「高橋さんは 83 歳になりました」と紹介した。体操が終わって、ステージを降りると、記者が待ちかまえていて、インタビューを受け写真を撮った。80 を過ぎて体操の指導をしているのは珍しいということだ。それがスポーツ新聞に載った。(続く)

7. つぶやき（編集後記に代えて）

FIFA ワールドカップ 2026 がスペインの連覇で終わった。やはり、Japan とはレベルが違った。いろいろあったが、やっぱりアメリカが開催に絡むとオリンピック同様、商業主義化する。そして、記憶に残ったのがノルウェーの FW アーリング・ハーランド（25）であった。今回の W 杯で 7 ゴールを挙げてノルウェーを初のベスト 8 に導いた。チャージされようが、なにをされようが蹴散らすあの屈強な体と技はすごい。ラグビーを想起させる。Japan が世界に向けてレベルアップするにはハーランドのような強靱な体づくりが不可欠かもしれない。

ラグビーの余韻が残っている中、2026 年 7 月 28 日 16 時 27 分頃、「令和 8 年熊本地震」が発生した。2016 年熊本地震の巨大な破壊域の南西側に隣接する「割れ残り」部分（日奈久断層帯）が動いた独立した大地震として解析されている。現在も余震が多発している。夏場の熱い中での救助・救命活動、避難等々、BPC が問われている。地震によるガス爆発という新たな課題も突きつけられた。日本列島の活断層のリスクと対策を改めて思い起こされる・・・。

編集発行人：Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典

発行元：Japa 日本専門家活動協会 <http://www.japa.fellowlink.jp/>

問合せ・連絡先：info@japa.fellowlink.co.jp